

銀嶺食品 インドネシア農産物6次化 8月から事業化調査

銀嶺食品（本社・福島市）は八月にも、インドネシアで農産物を安定供給する支援に向けた事業化調査に乗り出す。国際協力機構（JICA）の中小企業海外展開支援事業に採択された。JICAが二十日、発表した。

銀嶺食品はJICAを通じて将来と包括的業務提携契約を結び、農産物の生産から加工、販売までを一体となして行う六次産業化を「福島モデル」として展開してきた。これまでに構築した仕組みをインドネシアで導入する。

調査はJICAの委託事業で、東ジャワ州にある人口約十八万人のバトゥン市で行う。同市ではリンゴやニンジン、ジャガイモなどを収穫しているが、国内に流通していないため、生産から販売までの体制を整える方針。調査で成果が得られれば、十年の長期計画で営農を指導し、市場や販路の開拓を進める。将来的には世界中に

「福島モデル」を広めたい考えた。岡崎慎二社長は「東日本大震災後に培った安全安心な農産物流通の仕組みは、他国の産業支援に寄与するはずだ」と話している。

賞状を受賞 最高金賞で 報告書



賞状を手にする岡崎（左）、杉浦の両氏

世界的な品質評価コンテスト「モンドセレクション2017」で銀嶺食品の「しのぶ 柚子の故郷（ゆずのさと）」が最高金賞を受賞したのを

問（中央大大学院戦略経営研究科教授）は二十日、福島民報社を訪れ、高橋雅行社長に喜びを語った。

「しのぶ 柚子の故郷」が最高金賞を受けるとは、二〇一四（平成二十六年）年以来二回目。岡崎社長は「再び最高金賞を受けたのは、若い社員にしっかりと技術伝承できている証明。社員の自信につながるはずだ」と話した。杉浦特別顧問は五月にマルタ共和国で行われた授賞式に出席した。「世界に福島の商品の高い品質をアピールできた」と振り返った。銀嶺食品は「アップルリング プリオップ シュ」と「玄米食パン」で今回、銅賞を受賞した。